

## 愛と完全－共同体形成の原理

マタイによる福音書 5 : 43 - 48

「あなたがたも聞いているとおり、『隣人を愛し、敵を憎め』と命じられている。しかし、わたしは言うておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。あなたがたの天の父の子となるためである。父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである。自分を愛してくれる人を愛したところで、あなたがたにどんな報いがあるろうか。徴税人でも、同じことをしているではないか。自分の兄弟にだけ挨拶したところで、どんな優れたことをしたことになるろうか。異邦人でさえ、同じことをしているではないか。だからあなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい。」

(新共同訳聖書)

皆様が内坂先生を中心にこの聖天伝道所をお始めになってから、ちょうど十年になるという祝福すべき日の礼拝に、お招きをいただき、お話をする機会を得ましたことを、まことに有難く、光栄に存じます。

今朝は、この有名な「山上の垂訓」の一節から、イエスの語られた「愛」と「完全」という二つの言葉を、共同体形成という観点から、ご一緒に考えてみたいと思います。

### 1

まず、ここでイエスの言われた「敵を愛する愛」の性質を吟味することから始めたいと思います。

アメリカの黒人公民権運動の指導者であったマーティン・ルーサー・キングは、その代表的な説教「汝の敵を愛せよ」の中で、このイエスの愛を、ギリシャ語を使って次のように説明しています。

ギリシャ語訳の新約聖書が、愛を表す言葉は三つある。そのうち、エロスという言葉は、一種の美的な、あるいはロマンチックな愛を意味する。プラトンの対話篇では、エロスは神的なものの王国に対する魂の憧憬である。第二の言葉はフィリアで、これは一種の相愛であり、友人間の親密な情愛であり友情である。われわれは自分の好きな人々を愛するのであり、われわれは愛されるから愛するのである。第三の言葉はアガペーである。それは万人に対する理解であり、創造的・贖罪的な善意である。報いに何も求めないあふれるばかりの愛であるアガペーは、人間の心の中に働いている神の愛である。神がすべての人間を愛するから、われわれはその人々を愛するのである。この段階で、われわれは、彼がする行為を憎むけれども、悪事をするその人は愛するのである。

「汝の敵を好きになれ」と彼がいい給わなかったのは、われわれの幸いとするところであろう。まず、どうしても好きになれないというような人々はいるものである。「好きになる」というのは、センチメンタルな情愛の深い言葉である。公然たる目的が、われわれの存在そのものを粉碎し、われわれの進路に数えきれ

ないほどの邪魔物を置くことにあるような人に対して、どのようにしてわれわれは情愛を抱くことができようか。われわれの子供たちをおびやかす、われわれの家庭に爆弾を投げってくるような人を、どのようにして好きになることができようか。これは不可能である。しかしイエスは愛するということが好むということよりも偉大であることを認め給うた。イエスは、われわれに敵を愛せよと命じ給う時、エロスについても、フィリアについても語っているわけではない。彼は、万人に対する理解ないし創作的・贖罪的善意なるアガペーについて語り給うているのだ。この道に従い、このタイプの愛をもってこたえることによってのみ、われわれは天にいます、われらの父の子とすることができるのである。（蓮見博昭訳『汝の敵を愛せよ』新教出版社）

ギリシャ語には愛を表す語が三つないし四つ（このほかにストルゲーという、主として親子の愛情をあらわす語があります）ありますが、新約で使われているのは実はフィリアとアガペーの二つのみで、エロスは使われておりません。これはキングの思い違いではないかと思えます。ただキングがエロスという語を、ユダヤ人が伝統的に「隣人を愛し、敵を憎め」と教えた時の「愛」に当る語と理解していたのではないかということは、十分に考えられます。

「隣人を愛し、敵を憎め」という句は旧約聖書の中にはありません。しかしユダヤ人が「隣人」すなわち同胞である同じユダヤ人を愛し、「敵」すなわち異邦人を憎むということは、彼らの倫理の基本であり、生活の知恵でありました。ご存知のように古代オリエントの歴史は「肥沃な三日月形地帯」の争奪戦

でありました。ひとたびそこに入った者は何としてでも自分の既得権益を確保しようとして、民族が一致団結、互いに助け合い共に戦って、他民族の侵入を排除しようとし、それ以外に民族の生き残る道はなかったわけでありました。古代イスラエル民族、すなわち聖書の民族もまた紀元前十三世紀ごろにこの地帯の西南端に入って農耕定着民になって以来、ずっとこの倫理に従って生きてきたのです。しかも次から次へと興る古代オリエントの帝国に絶えずじゅうりんされ、イエスの時代にはローマの桎梏のもとにあった彼らが、隣人を愛すれば愛するほど彼らを攻める敵を憎まざるを得ず、敵を憎むことをもって隣人への愛のあかしとしたとしても、決して彼らを安易に責めることはできません。イエスはそうした事情を十分に知り、そうした彼らの精神的伝統に十分敬意を払いながらも、あえて、敵すなわち異邦人をも同じように愛せよと教えられたのであります。

「隣人を愛し、敵を憎め」という倫理は、それではユダヤ人、あるいは中東地域の人だけのものでありましょか。それは古代の未開の民の道徳でありましょか。もちろん決してそうではありません。人間はおしなべて昔も今もいつもそうなのだと思います。社会学でいう「内集団・外集団の倫理」がそれです。仲間うちはどこまでも仲良く、しかしヨソ者には無関心で冷たいという倫理の二重構造です。この場合、すなわち自分が所属していない集団—外集団（あるいはその成員）に対して無関心であり、これを排除し、これを憎み、これに敵対するということがある限り、自分の所属する集団—内集団（あるいはその成員）に対して、どんなに優しく、親切に、仲良くしようとも、それは決して本当の愛ではありません。それは愛しているのではなく、単に好きであるに過ぎない。そのよう

な愛はエロスであってアガペーではないのです。

こう考えてまいりますと、島国民族で同質性が高く、内集団・外集団倫理の日本版とも言うべき「イエ・ムラ共同体倫理」に規制されて生きてきた私ども日本人、そして今や日に日に縮まり行く世界の中で、閉ざされた社会から開かれた社会への転換を迫られている私ども日本人にとって（国際化、特に第三世界との交流において）、「敵を愛せよ」というイエスの教えは実に適切で、新しい生き方に対する豊かな示唆と大きな励ましとを与えてくれていると思います。

ところで『甘えの構造』の著者土居健郎氏はこの名著に先立つ『漱石文学における「甘え」の研究』という著書の中で、次のような興味ある指摘をしています。

欧米人はよく好きだけれども愛さない、という台詞を口にする。これはわれわれ日本人にとってちょっとした驚きである。われわれは好きになることは愛することだと思っているが、欧米人はこの二つの感情をはっきり区別する。英語で「好く」と「似ている」は同じ like で示されるように、彼らにとって好きになることは親近感を覚えることであり、両者の共通性を自覚することである。これに対して愛するとは、自分と異なる他者を愛することである。

この指摘は、先の「イエスがわれわれに『汝の敵を好きになれ』と言われなかったことは実に幸いだ」というキングの言葉にぴったりと符合しています。

いささか余計な話になりますが、私個人は「好きになる」ということがつまらない感情だとは思いません。「相手との共通性を自覚

して、互いに親近感を覚えること」は人間にとって大切に幸福なことです。ただそれは、愛と言えば、愛のほんの一部であり、愛へ至るきっかけに過ぎないのであって、それを愛そのものであると錯覚してはならないということだと思えます。好きと言う感情はすぐれて男女の間の感情でありましょう。恋愛は一途で、人を純粹にするなどの勝れた特性を持っていますが、その弱点は何といても当事者が自分たち以外の人（外集団）のことを全く忘れてしまうことです。ですから恋愛もまた、それだけでは愛として全うされないのです。むしろ「愛することは自分と異なる他者を愛すること」であって、自分と異なる存在、自分とは異質な存在を認めること、そういう存在を評価すること、別言すれば自分とライクでなく、自分がライクでもない者を愛することであるというのです。

## 2

次にキングの挙げた「フィリア」の愛について考えてみることにします。

フィリアは「友人間の親密な情愛であり友情」です。イエスのここの言葉で言えば、「愛してくれる人を愛したところで」「自分の兄弟に挨拶したところで」という、その愛がフィリアです。相互愛、すなわち互いに相手の価値を認めてそれを尊重し、互いに尊敬し、互いに愛しあうに価するゆえに愛しあい、互いの人格的完成のために愛し、愛される愛、これがフィリアです。実に美しい、充実した愛です。これこそ人間の持ち得る最高の愛ではないでしょうか。事実、ギリシャ人はこの愛、フィリアをもって彼らの至高の徳としたのでした。その典型の一つが、太宰治がその珠玉の短篇「走れメロス」に美しく描き出した、メロスとセリヌンティウスの「アミティエ・マスキューヌ」（男の友情）で

ありましょう。

それにもかかわらず、イエスはその愛を厳しく批判されました。「自分を愛してくれる人を愛したところで、あなたがたにどんな報いがあるか。自分の兄弟にだけ挨拶したところで、どんな優れたことをしたことになるか」と。そしてそのようなことならば、ユダヤ人が軽蔑していた取税人や異邦人でさえもしているのではないかと、彼らにチャレンジされたのであります。なぜでしょうか。

ここでも私はイエスが、いたずらにこの「異邦人（ギリシャ人）の愛」をなみしたとは思いません。イエスの倫理の基礎は決して民族の精神的伝統の廃棄にあるのではなく、その成就にこそあると言っておられるのですから（マタイ5：17）。イエスはフィリアに十分な敬意を払いながらも、それが人間の愛として素晴らしいだけそれだけ、そこに人間の恐るべき奢りがあることを洞察されて、それを怒り、悲しまれたのが、このような激しい否定のことばになったのではないのでしょうか。フィリアもまた、エロスと同じく、それだけでは決して完き愛にはなり得ないのです。

ところで太宰の「走れメロス」について興味あることは、彼がこれを書いたと同じ時に「駆込み訴へ」という作品を書いていることです。これは申すまでもなくイエスを裏切ったイスカリオテのユダの訴えのことですが、それが太宰自身のいわば「告白」であることは言うまでもありません。すなわち、ここで太宰は一方で友情の理想の姿を描きながら、他方で人間の愛とか信頼がいかにもろく弱く破れやすいものであるかを、自らの苦悩をもって訴えたのでした。現に「走れメロス」の最後において、メロスもセリヌンティウスも、自らの心の中にあれほど信じ切った友をも疑う瞬間があったことを告白しあい、それを深く恥じて互いに殴り合った後に、互いに

抱き合ったというのです。

エロスの愛がどんなに一途で情熱的であろうと、またフィリアの愛がいかにも美しく高貴であろうと、それだけでは人と人との関係、あるいは人が共に作りなす共同体の規範となることはできないようです。人間は弱く、醜く、不完全だからです。エロスは必ず排他的になり、フィリアは必ず特権のおごりにとられるところとなります。それらを一度否定して、しかもそれらをすべて包容するような愛、人間の不完全さのゆえに到底実現不可能であるけれども、その人間の不完全さのゆえにこそ、どうしてもなければならぬ愛、どうしても私どもが必要とする愛、そのような愛をイエスは、そして新約聖書は全く新しい言葉をもって「アガペー」と呼んだのです。

「敵をも愛する」アガペーの愛は、たとえ相手が敵（自分と異質の存在）であっても、なおその存在を認めようとする、たとえ相手が敵（どうしても好きになれない存在）であっても、なおその存在を理解しようとする、たとえ相手が敵（自分を憎む存在）であっても、なおその存在に対して善意をもって接しようとする、たとえ相手が敵（愛するに値しない存在）であっても、なおその存在に信頼を置こうとする— そのような愛です。キングの定義によれば「万人に対する理解ないし創造的・贖罪的善意」です。「完全であられる」天の父なる神が、不完全である人間、罪人である人間、神の愛に値しない人間に示して下さる愛、「悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださる」その愛です。そしてこの天の父の愛の意志に全く服従して生きられたイエスが、その生と死のすべてをもって教えられた愛、その十字架と復活を通してすべての人に等しく与えられた贖罪の愛、これがアガペーです。この無償の愛こそ「人間の心の中に

働いている神の愛」であって、愛の極致、愛そのものと言うべきであります。

### 3

「完全」という言葉の考察に移ります。

以上の文脈において48節の「至上命令」を読んでみますと（そう読むことが正しいことは、「それだから」という接続詞によっても明白だと思います）、これは決していわゆる個人道徳を説いたものではないことがわかります。これはどこまでも「愛」という関係語との関連において理解すべき言葉です。この点について、私がこの「至上命令」に対する最もすぐれた注解の一つ（注解書ではありませんが）であると思います、ボンヘッファーの獄中書簡の一節を引用したいと存じます。

…かつて若きヴィティコーは、「完全なことをなすために」世界の中に進んで行く、と言っている。従って問題は、<sup>アンスロー</sup>全体的人間（<sup>ボステレイオス</sup>ἀνθρώπος τέλειος）に関わるものであり（レイオスは言うまでもなくもともと「全き」—完全を意味している）—「あなたがたの天の父が『<sup>レイオス</sup>完全』であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい」（マタイ5：48）—それはヤコブ1：8の「二心の者」（ἀνῆρ διψυχος）—とは異なる。ヴィティコーは、現実の生活において正しく処することを求め、その場合常に経験者の助言に聞くことによって、要するに、自ら「全体の一員」となることによって、「完全をなす」のである。われわれは自分一人で「完全な者」となるのではなくて、ほかの者と一緒になって始めてそうなるのである。…（倉松功・森平太訳『抵抗と信従』新教出版社）

私は長いこと、この「至上命令」を個人道徳のことと理解し、「完全な者」とは個人として間然するところのない立派な人間のこととっていました。しかし、このボンヘッファーの言葉によって、全く新しい読み方を教えられました。

山上の垂訓はそもそも天国の道徳です（マタイ5：3参照）。言いかえれば、それは信仰共同体の倫理です。従ってそこにおける人間の完全は「全体的人間」（ἀνθρώπος τέλειος）に関わるものであって、彼は決して「自分一人で『完全な者』となるのではなくて、ほかの者と一緒になって」、「自ら『全体の一員』となることによって」、初めて完全な人間になるというのです。

イエスの言われる「完全」を以上のように理解することが許されるとすれば、では一つの共同体、あるいは一つの全体が完全であるとはどういうことであるのでしょうか。

一つの共同体、それが家庭であれ、教会であれ、学校であれ、会社その他の団体であれ、地域共同体であれ、さらには人類社会であれ、それが全体として完全であるというとき、そこには根本的に二つの「完全さ」があるように思われます。一つは、いわばフィリア的完全です。そこでは、その共同体の<sup>メンバー</sup>構成員はすべてひとりひとり完全で、互いに尊敬に価する立派な人間です。そこに働く原理はフィリアの愛であり、メンバーはすべてこれに応え得る高潔・有能の士ということになります。いわばエリート集団です。そのような共同体は素晴らしいものかもしれませんが、果してそのような共同体は実在するのでしょうか。なぜなら、もしそこにその資格を少しでも欠くメンバーがいたとしたら、彼は当然その共同体を去らねばならないことになるからです。それがフィリアが本質的に持っている性格だからです。こうしてこの共同体は常にそのメ

ンバーを淘汰する（切り捨てる）ことになり  
ます。そうでなければその完全を保つことが  
できないからです。そのような共同体は必然  
的に排他的になり、自ずと内集団・外集団倫  
理によって自らも蝕まれていくことになるで  
ありましょう。

しかし幸いなことに、共同体の完全にはも  
う一つこれとは全く別な完全があります。そ  
れはフランスの実存主義哲学者ガブリエル・  
マルセルの用語で言えば、「存在の秩序」を  
もって共同体形成の原理とするもので、いわ  
ば「存在における完全」であります。ちなみ  
に、「存在の秩序」に対置されるのは「所有  
の秩序」で、これはフィリアによる秩序であ  
ると言ってもよいでしょう。そこでは人はその  
人の価値とか能力、すなわちその人の「所  
有」によって量られ、それが共同体形成の原  
理ともなるわけです。

これに対して、「存在の秩序」がその形成  
原理であるような共同体においては、メンバ  
ーのひとりひとは必ずしも「完全な」人間  
ではないかもしれない。立派な人間である  
とは限らない。学校のクラスで言えば、満点  
はおろか試験をする度に成績がわるくて、ク  
ラスの平均点がその一人のために下ってしま  
うような生徒、家庭で言えば、その心身の障  
害などのために他の家族全員の重荷になって  
いるような家族の一員、そのほかどんな共同  
体であれ、フィリア的完全から見ればその完  
全をこわしているようなメンバー（従って当  
然その共同体から切って捨てられるような  
メンバー）— そうしたメンバーもひとりひとり  
全部含めて、そのひとりひとりがその共同  
体の中に確かに存在している、そのひとり  
ひとりがその共同体の必要欠くべからざる  
構成員である、そしてその中のどの一人が  
欠けてもその共同体の完全は失われてしま  
う— そのような意味での完全が「存在にお  
ける完全」

であります。「天の父の完全」が求める完  
全とはそのようなものではないでしょうか。そ  
してこれが「天の父の完全」であるゆえに、  
この全体（人類共同体ひいては地球共同  
体）からもれる人間は一人もいないとい  
うことになります。

いま家族という共同体のことを考えてみ  
ましょう。もちろん世の中には、家庭内に  
疑似フィリア的完全を求めるために起  
こる悲劇が絶えませんが、この第一次  
共同体では普通は今申したような「存  
在の完全」の原理が働いています。どん  
なに家族に負担をかけるような一員  
でも、その一員にいかにもして家族  
の大切な構成員であってほしいと願  
うのが家族というものでしょう。「不  
肖の子ほどかわいい」と言うように、  
「所有の秩序」において<sup>イエス</sup>負の存在は、  
「存在の秩序」の中ではむしろその  
ことのゆえに一層に貴く、その存在  
によって家族という共同体は一層に  
堅固になり、その存在は家族共同  
体の完全に不可欠のものとなるの  
ではないでしょうか。

そして言うまでもなく、このような  
共同体においてその構成員を互いに  
結びつけている原理こそ、アガペ  
ーの愛であります。存在にお  
ける完全は、アガペーの愛によ  
って支えられ推持されているので  
す。

「天の父が完全であられるように、完全  
な者」となるべき、この「天の父の  
国—人類共同体」のメンバーは、  
ひとりひとり、たとえ個人として  
はいかに不完全な存在であろう  
と、すべて一人残らず神がイエ  
ス・キリストの血をもって贖  
いとして下さった存在です。そ  
の存在は、まさに「地球より重  
い」のであって、この存在の重  
さの中にこそ、人間の価値と尊  
厳の根拠があり、人間が形成す  
るあらゆる共同体の基盤がある  
のだと信じます。それは私ども  
が「全体の一員」として、「全体  
<sup>イエス</sup>的人間」（完全な者）となるため  
でありま



す。

#### 4

話はこれで終わりなのですが、私が今朝このような話をした理由というか意図は二つあります。それを申しあげて結びとしたいと存じます。

一つは、おこがましい言い方になりますが、せっかく私のような者をこの記念礼拝にお招き下さったのですから、皆様の聖天伝道所十年を私なりの言葉でお祝い申し上げたいと思ったからであります。

考えてみますと、<sup>エングレンズ</sup>教会はこの世にあってそこにアガペーの原理が働き、存在における完全が実現するおそらく唯一の場であります。

「おそらく」と言ったのは、家庭が考えるもう一つの場だと思われるからです。私どもは、自ら選んである家庭に生まれてくることはできません。同様に、教会にも、私どもは自分の意志でこれに加わるわけではありません。自分の意志を超えて、ただ私どもを救って下さった主イエス・キリストご自身によって「仲間に加えられた」にすぎないのです

(使2：47)。これらの共同体はまさに<sup>フラ</sup>第一<sup>イマリー</sup>次共同体であって、私どもがこれを形成できるものではありません。しかもなお、その形成原理であるアガペーそのものの性質、すなわちキングの言うように「クリエーティヴ」な性質のゆえに、それを育成し、形成していくべき共同体でもあります。皆様がここにそのような尊い共同体を与えられ、十年の間ここで共に生き、共に生活し、共に働き、このような共同体こそが「世にあるべき共同体」であると共に証言してこられたということは、神の格別な恵みによることは申すまでもありませんが、皆様の信仰の共働によるもので、まことに有難く感謝すべき出来事であると存じます。私はここに心からの敬意と祝

意とを表するものです。

もう一つは、これは付け足しにすぎませんが、人類の歴史未曾有の危機と言っていいようなこの時代に、共同体形成の原理を考へてみることの重要性をあらためて痛感したからであります。

所有の秩序・存在の秩序と言ひ、フィリアの原理・アガペーの原理と言ひ、いずれも原理であって、現実の共同体は全てこの両原理が混在し、共働して形成されていることは申すまでもありません。いずれかの原理のみによって純粹に形成されている共同体というようなものは、もちろん存在しないわけです。辛うじて家族と教会がアガペーの原理によって立っていると云える共同体であることは、いま申しあげた通りであります。

しかし、私どもが小は家庭から大は人類共同体に至る、どのような共同体を形成するに当たっても、この二つの原理のいずれを基本的な考え方として、その「完全」を求めるかは、私どもにとって決定的な意味をもつということは覚えておくべきだと思います。なぜなら、現代のように山積する諸問題のほとんどすべてが人類全体の存亡に関わるというような時代には、その選択は人類の未来を決定することになるからです。

環境、食糧、人口、南北格差、差別、冷戦構造終結後の世界新秩序—こうした問題のどれ一つをとってみても、そこにたとえ僅かなりと「アガペーの原理」に対する信頼と、「存在の秩序」に対する畏敬なくして、どうしてこの人類・地球共同体がその存在を維持、促進していくことができるだろうかと思わざるをえません。

私どもは、このような危機的状況にある時代に、破格の恵みによってキリストの教会に加えられたことを感謝し、ささやかながらも「地の塩・世の光」として、それぞれの共同

体を形成していく責任を果すべく努めるものでありたいと願います。

1991年4月14日、聖天伝道所の「創立10周年記念礼拝」において語ったもの。

(所載) 「からしだね」54号

(大阪天下茶屋読書会 . 1991年春)